

遠隔授業観察システムの活用から派生する音楽科教師教育の課題

—授業実践力の育成をめざした T.T. による模擬授業の可能性と評価スタンダードの構想—

長島真人*

遠隔授業観察システムを活用した大学授業は、学生たちの音楽授業に関する観察力をゆさぶり、臨床的な指導力の育成を促す有効な場になる。特に、理論的な講義を展開している大学教員自身が自らの理論に基づいて授業を実践し、遠隔授業観察システムによって学生たちに観察させることは、音楽科教育の理論と実践を統合的に把握させていく上で極めて有効な場になる。しかしながら、ここで学生たちが展開した探究活動は、授業実践者としてではなく、授業観察者として展開した探究活動に留まっている。したがって、このシステムの活用によって育まれる授業観察力が、授業実践場面で有効に生かされ、授業実践力の育成に関連づけられていく場の工夫が必要になってくる。また、学生たち自身が、自らの授業実践者としての力量を反省的にとらえ直すガイドラインも必要になってくる。そこで、本稿では、学生たちの授業観察力と授業実践力の双方を関連づける場として、大学教員と学生との T.T. による模擬授業の演習に着目し、筆者自身が試みた T.T. による音楽授業研究の実際から、その有効性と可能性を検討していく。

また、学生たちが授業実践者としての力量を自己点検するためのガイドラインとして、評価スタンダードを開発していくために検討すべき問題を明らかにしていく。

〔キーワード：音楽授業、遠隔授業観察、T.T. による模擬授業、自己評価スタンダード、教師教育〕

はじめに

遠隔授業観察システムは、音楽科の授業研究や大学授業の改善に関して、様々な可能性を気づかせてきた。第一に、本システムを活用することによって、遠距離にある附属学校での臨床的な学習指導場面を学生たちに大学の講義の中で紹介し、筆者自身が行った音楽授業を、学生たちと直ちに振り返り、対話的な指導を通して学習指導の在り方を共に考えることが可能になった。第二に、大学で講義だけを行ってきた筆者自身が学生たちに一つの学習指導構想と実践の事例を直接的に紹介し、理論的に紹介してきた音楽授業の実際を具体的に把握させ、納得させることが可能になってきた。¹⁾しかしながら、このような大学授業の成果から、新たな課題も明らかになってきた。第一に、臨床的な学習指導場面を観察することができた学生たちが、観察で得た成果を自らの授業実践に生かす場を工夫する必要がある。つまり、授業観察力と授業実践力とを関連づける場が必要になってくる。そこで、本研究では、筆者自身と学生との T.T. による模擬授業の可能性を検討していくことにした。なぜならば、学生にとって、大学教員との T.T. という環境は、授業の

観察によって得た知見を実践の場で大学教員と共有しながら実践の方法を模索する場となり、学生たちの授業観察力と授業実践力とを関連づける有効な場になると考えたからである。第二に、学生たちが授業の構想と実践の実際を吟味し、批評し、自分自身の授業実践力の育成に生かすためには、音楽授業の実践者としての力量を自己点検することができるようなガイドラインを開発する必要がある。つまり、音楽授業の構想と展開、評価を実践していく上で必要とされる諸能力の観点を明確化し、学生たち自身が自らの能力の達成度を反省的に点検していくことができるようなガイドラインが必要とされているということである。

以上のような見地から、本稿は、このような課題に迫るための準備的な試みとして行った T.T. による音楽授業の試みと、音楽授業の実践ために必要とされる力量を自己点検する評価スタンダードの開発に関する検討の中間的な報告を紹介したい。

* 鳴門教育大学 芸術系（音楽）教育講座

1. T.T.による音楽授業の試みが示唆する教師教育

(1) T.T.による音楽授業研究の成立の背景

学生たちとのT.T.による授業実践研究を行うための準備として、筆者は、公立小学校の教諭とT.T.による音楽授業の機会を得ることができた。この企画は、日本芸術教授学研究会という研究グループによって試みられた授業研究会であった。この研究会は、1997年に発足し、芸術教育に関する実践的かつ臨床的な理論研究と実践研究を進め、その充実と発展及び交流を図るとともに、会員相互の連携と協力を促進することを目的とした研究グループである。筆者は、この研究グループに、発足の当初から参画してきた。平成18年8月4日と5日に開催された研究大会では、「子どもが学ぶ授業をつくる 授業を考える - 子ども・実践者・研究者による新たな学びの創造 -」というテーマで研究行事が企画された。この研究会の趣旨は、平成18年度の研究大会の一次案内の冒頭に記述された次のような挨拶文の中に明らかにされている。

子どもの表現は、子どもたちの学びの姿そのものであります。日々教壇に立つ実践者である私たち教師に、数多くのことを学ばせてくれます。これまで、「子どもの学び」は、「何かを知り・わかる」といった「理解」の側面で数多く論じられてきましたが、実践の場で出会う子どもたちの姿は、「子どもが、行為をおこし、それにより起きる出来事にかかわり合い、浸透し合うことにより、さまざまな意味の成り立ちを自己のものにしていく」ことにこそ、学び本来の姿があることを気づかせてくれてもいます。今日子どもたちも教師も、いわゆる「教育」や「学習」という孤独な世界に浮遊している存在であるかのようでもあります。本来子どもも教師も、〈今ここに共に生きるもの〉であり、〈共に学ぶ存在である〉のではないのでしょうか。そして、その〈共に学び、生きる〉ことを成り立たせているのが、〈授業〉という営みではないのでしょうか。

ここに示されているように、この研究会では、教育の営みを子どもたちや教師による個別的な世界としてではなく、共に存在し、共に生き、共に学ぶ存在としてとらえ、授業はこのような共同的な分かち合いによって成立していく営みの場としてとらえ直していくべきことを強くアピールしてきた。そこで、今回は、授業実践者と授業研究者が共同し、子どもの学びを拓こうとする共通のフィールドに立ちながら、学習指導の在り方を考える公開授業が試みられることになった。このような研究活動の経緯の中で、筆者は佐賀県嬉野市の塩田小学校の水山玲子教諭とT.T.で公開授業を行うことになった。そこで、筆者は、このような研究会の趣旨をふまえながら子ども

たちの学びを拓く音楽授業の在り方を検討すると同時に、学生たちの授業実践力の育成をめざした大学授業の指導内容の基礎研究として、このT.T.による学習指導を実践的に研究することにした。

(2) 塩田小学校の子どもたちとの対面

T.T.による公開授業の準備は、塩田小学校が年度を改めた平成18年の4月から開始した。最初は、共同授業者である水山教諭とe mailによって連絡を取り合い、子どもたちの学習状況を確認し、子どもたちの学びを拓く音楽授業の内容を模索し始めた。そして、6月30日に企画された事前研究会で、筆者が塩田小学校を訪問し、子どもたちと対面し、筆者自身が音楽の授業を単独で行うことになった。塩田小学校では、すべての授業を通常の45分で実施するのではなく、指導内容の特性をふまえて弾力的に対応し、30分で終わったり、60分で行う授業を平素から実施していた。そこで、筆者は、通常の45分授業で2コマにかけて実施する予定の授業を60分の1コマで実施する学習指導過程で構想した。教材は、6年生の第一学期の歌唱教材の中で難解に思われがちな歌唱共通教材「われは海の子」を扱うことにした。この教材は、同じ時期に、鳴門教育大学の附属小学校でも筆者自身によって実施し、同時に、遠隔授業観察システムを活用して大学の講義を構想し、実践したのもであった。

(3) 歌唱共通教材「われは海の子」の吟味と授業の構想

水山教諭から示唆された子どもたちの学習状況と筆者自身が吟味してきた歌唱共通教材「われは海の子」の特性をふまえながら授業を構想し、その結果、児童観や教材観、指導観は、以下のようになった。

第1学期の生活を終えようとしている6年生の子どもたちは、これまでの音楽の学習において、「冬げしき」や「おぼろ月夜」のような文語体の歌詞による唱歌と出会ってきた。そして、子どもたちは、文語体の日本語の美しい響きを味わい、歌詞に描かれている日本的な自然の美しさと、音楽に象徴されている日本人的な心情を探究し、自分なりに歌唱表現を工夫してきた。このような学習は、子どもたちが我が国の文化のよさを知ると同時に、日々の生活を主観的に深く、ていねいに見つめていく力を育てていくために、ますます深めていかなければならないものである。特に、最高学年になった6年生は、「ふるさと」の学習に迫るために、歌の気持ちを想像しながら自分なりに歌唱表現を工夫していく力を伸ばしていくことが課題になっている。

このような6年生の子どもたちにとって、「われは海

の子」は、歌唱表現を工夫する力を伸ばし、第1学期の生活と来るべき夏休みの生活をより豊かなものにとらえ直していく上できわめて有効な教材である。歌詞は白砂青松と呼ばれてきた日本的な夏の海辺の美しさを描いている。楽曲の構造は、簡素な和声と旋律の動きによって、文語体の日本語による美しい響きが生かされるように仕組みられている。音楽はさわやかな夏の気分を象徴している。音域は、これまで学習してきた「冬げしき」や「おぼろ月夜」に比べると広くなり、歌唱表現の技をのばしていく上で適している。

具体的な指導にあたっては、文語体の日本語の美しい響きと、非和声音や最高音、旋律音形、リズムパターン、和声の動き等に注意を促し、子どもたちが旋律の中にみられる拍節の構造に気づき、楽曲が象徴している「さわやかな気分」を音楽から想像し、音楽の気持ちにふさわしい歌唱表現を工夫することができるように指導していきたい。そして、この楽曲との出会いを通して、子どもたちが自分の中に潜在していた「さわやかな気分」を確かめ、第1学期の生活をていねいに見つめ直し、小学生としては最後になる夏休みの生活を有意義に過ごすことができるように促していきたい。

このような授業の全体的な構想に基づき、60分で完結される授業の学習目標は以下のように設定した。

1. 日本語の美しさと日本的な風情を想像させる唱歌のよさを知り、歌い継いでいこうとする気持ちを育むことができる。
2. さわやかな夏の風情を象徴している楽曲全体の曲想を味わいながら、歌唱表現を工夫することができる。そして、

これまで体験してきた夏の生活を思い出しながら、小学生最後の夏の日々をていねいに見つめ直すことができる。

3. 賛美歌風の簡素な旋律の動きの中にみられる拍節の構造（音楽のエネルギーの動態）を生かしながら、歌唱表現を工夫することができる。

また、評価の観点として、次のような内容を明らかにした。

- ・文語体の日本語の響きに親しみ、楽曲の中にみられるふしのまとまりと音楽の盛り上がりを生かしながら、歌唱表現を工夫することができる。
- ・楽曲が描いている海辺の様子と歌の気持ち（さわやかな気持ち）を音楽から想像しながら、歌唱表現を工夫することができる。

学習指導過程に関しては、本来の45分の授業の場合は、5分程度の〈導入〉で既習曲を扱い、その後、教材となる楽曲の全体像を把握することを目的とした〈展開(1)〉を15分程度行い、その後、本時の目標に直接的に関わる特定の要素に注意を促し、音楽の全体像のとらえ直しを促すことを目的とした〈展開(2)〉を15分程度行い、最後に、〈まとめ〉で本時の学習を振り返り、次時の課題を伝えるように構想することを基本的なモデルとしてきた。しかし、今回は、一回きりの対面を目的とした授業であったので、60分という授業時間の中で、本来の45分で2コマ分の授業内容を実践するように構想した。その結果、学習指導過程は、以下に示すように、〈導入〉、〈展開(1)〉、〈展開(2)〉、〈展開(3)〉、〈まとめ〉という流れになった。

本時の指導家庭

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
導 入	1. 指導者と対面する。 ・既習曲として校歌を歌う。	1. 文語体の日本語の美しい響きが生かされた日本の歌を学習することが課題であることを伝える。 ・音楽の授業の雰囲気を高める。	・学習への構えが成立しているか。
展開(1)	2. 「われは海の子」の旋律の動きを聴唱法によって把握する。 ・範唱用CDで「われは海の子」を鑑賞し、文語体の歌詞による唱歌の雰囲気を味わう。 ・範唱を模倣しながら歌う。 ・ピアノ伴奏をよりどころとしながら歌う。 ・ピアノ伴奏を聴き、拍の流れに注意しながら旋律の動きを確認する。	2. 楽曲全体の雰囲気を感じ取らせる。 ・範唱用CDとピアノ伴奏から楽曲全体の雰囲気を把握させる。 ・四拍子の拍の流れののって歌えるようにピアノ伴奏で注意を促す。特に、呼吸のタイミングに注意を促し、一緒にそろえて歌い始めることができるように工夫させる。	・自分なりに楽曲全体の雰囲気の特徴づけることができたか。 ・四拍子の拍の流れののりながら、旋律の動きを概括的に把握することができたか。

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
展開(2)	<p>3. 歌詞の意味と文語体の日本語の美しい響きに注意しながら、歌唱表現を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文語体の日本語の響きを確かめる。 ・歌詞の意味を確かめる。 ・文語体の日本語の美しい響きが旋律の動きの中に生かされた歌唱表現を工夫する。 ・範唱用 CD を聴き、文語体の日本語の美しい響きと歌の気持ちを確かめる。 	<p>3. 文語体の日本語の美しい響きを味わわせながら、歌唱表現として生かせるように工夫させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者の朗読を模倣しながら歌詞と一緒に朗読し、七五調の歌詞の中にみられる言葉のリズムを確認させる。 ・さわやかな夏の海辺の情景と人々の暮らしが描かれていることを確認させる。 ・「白波」と「いそべ」「松原」「とまや」「なぎさ」という歌詞に着目させ、写真を参考にさせながら、かつての日本のいたるところでみられた夏の海辺の自然と人々の暮らしの様子を音楽から想像させる。 ・言葉の響きが旋律の動きの中に生かされるように、発声に注意を促す。特に、文節の冒頭にある母音の発声に注意を促す。 ・文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌唱表現を味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の意味から描かれている情景を確認することができたか。 ・旋律の中に生かされている文語体の日本語の美しい響きに注意を向け、情景を音楽から想像しながら歌唱表現を工夫することができたか。
展開(3)	<p>4. 歌詞の意味とふしのまとまりに注意しながら、楽曲全体の曲想をとらえ直し、より豊かな歌唱表現を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旋律の中にみられるエネルギーの推移に注意しながら範唱用 CD やピアノ伴奏を聴き、より豊かな旋律表現を工夫する。 ・歌詞の内容をよりどころとしながら、さわやかな日本の夏の風情を愛する心を音楽から想像し、歌唱表現に生かせるように工夫する。 	<p>4. 歌詞の内容をより詳細に確認させると同時に、非和声音や最高音、旋律音形、リズムパターン、和声の動きによって特徴づけられている旋律の動きに注意を促し、文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌唱表現を工夫させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・和声の動きと旋律の動き、文語体の日本語の響きに注意を促し、旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を確認させ、歌唱表現に生かすことができるように工夫させる。 ・「さわぐいそべ」や「わがなつかしき」「なみを」「すいて」「いみじき」という歌詞とサブドミナントを強調している和声の動きに着目させ、日本的な夏を風情を愛好している心情を音楽から想像させる。 ・楽曲が描いている情景や心情を音楽から想像し、ふしのまとまりを生かしながら歌唱表現ができるように工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽曲の中にみられる文語体の日本語の美しい響きと旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を生かしながら、歌唱表現を工夫しているか。 ・楽曲の中にみられるさわやかな気分味わいながら、歌唱表現を工夫しているか。
まとめ	<p>5. 本時のまとめとして、ピアノ伴奏に合わせて、3番まで通して歌う。</p>	<p>5. 本時の学習で自分なりにとらえ直すことができた曲想を生かしながら歌唱表現することができるように注意を促す。</p>	

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
<ul style="list-style-type: none"> ・本時に注意したことを思い出しながらかう。 ・ワークシートで本時で学んだことを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の成果を振り返り、次時の学習課題を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省唱歌として歌い次がれてきた「われは海の子」のよさを自分なりに知ることができたか。

この授業を通して、子どもたちと対面し、子どもたちの学びの状況を直知することができた。子どもたちは、最初は、初めて男性教師から音楽の指導を受けたため、緊張していたようであったが、授業の後半では、かなり精神的に歌い始めた。子どもたちは、歌唱共通教材「われは海の子」の学習を通して、文語体の日本語の歌詞による唱歌のよさを知り、旋律表現の工夫の仕方を学ぶことができたようであった。しかし、子どもたちは、まだ、二つの声部に分かれて合唱する体験を味わっていないことが明らかになった。そこで、8月に実施する公開授業の内容は、子どもたちにとって未経験であった合唱教材を扱うことにした。その結果、公開する授業の単元は、「歌の気持ちを合唱に」ということになった。子どもたちの学びの状況に適した楽曲として、「星空はいつも」（教育芸術社）を教材として扱うことになった。

この授業のもう一つの成果は、共同授業者となる水山教諭とのコミュニケーションが具体的に深まったことであった。e mailでの対話や筆者の研究論文を事前に紹介し、筆者の音楽科教育に関する基本的な見解や音楽の学習理論に関する知見を若干は紹介していたが、水山教諭は、実際に筆者自身が行う授業を参観して、筆者がめざしている音楽授業像を共有することができたように思えた。水山教諭は、この時点で教職歴が17年目、音楽に関する専門的な課程での教育は受けていないがピアノに精通し、音楽の専科教員として活躍している教員であった。また、佐賀県内で音楽授業の研究授業者も体験していた。このようなベテラン教師であったために、わずかな情報交換だけであったが、筆者自身の授業を観察することによって、8月に試みるT.T.による音楽授業のイメージが共有されたようであった。この効果は、大学において、遠隔授業観察システムを活用して学生たちとの音楽科教育の実践に関する分かち合いの成果を実感してきたことと同じであった。水山教諭は、音楽科教育の理念や方法に関して、筆者との共有体験を経た後で、T.T.による音楽授業構想に取り組むことになった。

(4) T.T.による合唱指導の構想

歌唱共通教材「われは海の子」の実践を通して対面することができた塩田小学校の6年生の子どもたちの学習状況を念頭に置きながら、また、水山教諭と連絡を取り合いながら、8月の公開授業に向けて本格的な授業構想が展開されることになった。T.T.の授業を構想するため

に最初に行ったことは、子どもたちの学びの状況に関する認識の共有と、教材となる楽曲に関する認識の共有であった。子どもたちの学習状況に関する情報を水山教諭から得ながら子ども観を共有していった。次に、子どもたちの学習状況を確認し合った後で、教材の選定と吟味を行い、教材観を共有していった。教材となる歌唱曲「星空はいつも」は、旋律の動きや和声の動きが美しく、6年生の子どもたちには魅力的な合唱曲になるように思われた。そこで、教材となる楽曲の分析を通して、旋律表現のあり方や伴奏のあり方、楽譜等の資料の工夫に関して、共通認識を高めていった。特に、和声と旋律の動きを分析し、楽曲の中にみられる拍節の構造を吟味しながら、子どもたちに気づかせたい音楽の仕組みと歌の気持ちを検討した。以上のような分かち合いによる教材研究の結果、児童観と教材観、指導観は、以下のようになった。

6年生の子どもたちの音楽の学習に対する構えは、非常に素直で、音楽に対しての関心は高く、音楽の美しさを象徴する楽音構造の仕掛けに関する知的な好奇心が芽生え始めている。また、最高学年の生活に入り、人の思いを想像し、慈しみの心や愛する心を自分なりに想像する力は、ますます豊かになってきている。歌唱の学習では、歌唱共通教材である「おぼろ月夜」と「われは海の子」を学習し、文語体の美しい日本語の響きを生かしながら、楽曲全体の曲想にふさわしい歌唱表現の工夫を行ってきた。また、「思ひ出のメロディー」や「翼をください」のような多彩な和声の動きをもつ楽曲にも出会い、ピアノ伴奏をよりどころとしながら歌唱表現を工夫する学習も経験してきた。しかしながら、子どもたちは、主として斉唱に取り組んできており、2つの声部に分かれて合唱づくりを試みる学習は、まだ本格的に取り組んではいない。とはいえ、「ラバースコンチェルト」の器楽合奏では4つのパートに分かれて演奏し、音の重なり合いの美しさを味わう学習を経験してきた。

このような6年生の子どもたちにとって、「星空はいつも」は、歌唱表現を工夫する力を伸ばし、合唱表現の基礎的な技を身につけていく上で有効な教材である。また、子どもたちが音楽の美しさの探究と表現の工夫を通して、「星空」がたとえている「愛と慈しみに満ちた人々の存在」に気づき、日々の生活をていねいに見つめ直す上でも有効な教材である。歌詞は子どもたちを静かに見守り、慈しんできた人々の存在を「星空」にたとえている。楽曲の構造は、非和声音や借用和音、変化和音、偽進行の効果、サブドミ

ナントを強調する和声の動きによって、反復される旋律の動きに変化が生じるように仕組まれている。そして、このような音楽の仕掛けによって、子どもたちを慈しみ、子どもたちの将来を祈るような気持ちが象徴されている。部分三部合唱になっている第三フレーズでは、主として三度の響きが用いられ、合唱の表現の技を身につける教材として適している。

具体的な指導にあたっては、弱起の旋律の動きの中に見られる日本語の響きと、非和声音や借用和音、変化和音、偽進行の効果、サブドミナントを強調する和声の動き、二つの声部が響きあう効果等に注意を促し、子どもたちが旋律の中にみられる拍節の構造に気づき、楽曲が象徴している「愛と慈しみの心」を音楽から想像し、音楽の気持ちにふさわしい歌唱表現を自分なりに工夫することができるように指導していきたい。そして、この楽曲との出会いを通して、子どもたちが自分の中に潜在していた「愛と慈しみの心」を確かめ、自分たちを慈しみ、見守ってくれている人々の存在を思い浮かべ、日々の生活をていねいに見つめ直すことができるように促していきたい。

このような授業の構想に基づき、授業の学習目標と授業計画は以下のように設定した。

単元目標

1. 歌の気持ちを自分なりに想像しながら、音楽のよさを分かち合い、望ましい合唱表現を工夫しようとする気持ちを育むことができる。

2. 楽曲の中にみられる歌の気持ち（愛と慈しみの心）を音楽から想像しながら、合唱表現を工夫することができる。
3. 非和声音や借用和音、変化和音の効果によって特徴づけられている和声の動きをよりどころとしながら、旋律の動きを感じ取り、合唱表現に生かすことができる。

指導計画（全2時間）

- 第一時 ・弱起の拍の流れと和声の動き、ふしのまとまりに注意しながら、主旋律の歌唱表現を工夫することができる。
- ・広い星空と星が瞬いている様子を音楽から想像しながら、歌唱表現を工夫することができる。
- 第二時 ・和声の動きと第三フレーズの低旋律の動き、二つの声部が響きあう効果に注意しながら合唱表現を工夫することができる。
- ・星空にたとえられている人々の思いを想像しながら、楽曲全体の曲想にふさわしい歌唱表現を工夫することができる。

第一時間目は、水山教諭によって45分の授業で実施するように計画した。そして、第二時間目の公開授業では、先の歌唱共通教材「われは海の子」の実践と同様に、60分の授業で構想した。具体的な学習指導過程は、水山教諭との確認作業を繰り返しながら、以下のように構想した。ここでは、筆者と水山教諭の双方が、できるだけ対等な立場に立って、子どもたちの学びに関わることができるように構想した。

第一時の学習指導過程（指導者：水山玲子）

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
導 入	1. 本時の学習課題を確認する。 ・既習曲を歌う。	1. 弱起の音楽の特徴と、ふしのまとまり、日本語の響きに注意しながら、正規の伴奏で主旋律の歌唱表現を工夫することができるようになることがねらいであることを伝える。 ・音楽の授業の雰囲気が高める。	・学習への構えが成立しているか。
展開(1)	2. 「星空はいつも」の旋律の動きを聴唱法によって把握する。 ・範唱用CDで「星空はいつも」を鑑賞し、楽曲全体の雰囲気を味わう。 ・範唱を模倣しながら歌う。 ・主旋律を含むピアノ伴奏をよりどころとしながら歌う。 ・正規のピアノ伴奏をよりどころとしながら歌う。 ・範唱用CDを聴き、主旋律の動きを確認する。	2. 楽曲全体の雰囲気を感じ取らせる。 ・範唱用CDとピアノ伴奏から楽曲全体の雰囲気を把握させる。 ・弱起の四拍子の拍の流れにのって歌えるようにピアノ伴奏で注意を促す。特に、呼吸のタイミングに注意を促し、一緒にそろえて歌い始めることができるように工夫させる。	・自分なりに楽曲全体の雰囲気の特徴づけることができたか。 ・弱起の四拍子の拍の流れにのりながら、旋律の動きを概括的に把握することができたか。

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
展開(2)	<p>3. 歌詞の意味と日本語の響き、ふしのまとまりに注意しながら、歌唱表現を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の意味と日本語の響きを確認する。 ・日本語の響きが活かされた歌唱表現を工夫する。 ・旋律の中にみられるエネルギーの推移に注意しながら範唱を聴き、より豊かな旋律表現を工夫する。 ・範唱用 CD を聴き、日本語の響きとふしのまとまり、歌の気持ちを確かめる。 	<p>3. 範唱によって、歌詞の意味と日本語の美しい響き、ふしのまとまりに注意を促しながら、歌唱表現を工夫させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者の朗読を模倣しながら歌詞と一緒に朗読し、歌詞の意味と日本語の響きを確認させる。 ・「やさしく あおくもえ」と「やさしく まどにゆれ」という歌詞に着目させ、写真を参考にさせながら、優しくまたたく星空の情景を音楽から想像させる。 ・言葉の響きが旋律の動きの中に生かされるように、発声に注意を促す。特に、文節の冒頭にある母音の発声に注意を促す。 ・和声の動きと弱起の旋律の動き、日本語の響きに注意を促し、旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を確認させ、歌唱表現に生かすことができるように工夫させる。 ・弱起の旋律の動きの中で日本語の響きが活かされた歌唱表現のよさを味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞から描かれている情景を確認することができたか。 ・旋律の中に生かされている日本語の響きに注意を向け、情景を音楽から想像しながら歌唱表現を工夫することができたか。 ・楽曲の中にみられる日本語の響きと弱起の旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を生かしながら、歌唱表現を工夫しているか。
まとめ	<p>4. 本時のまとめとして、ピアノ伴奏に合わせて、3番まで通して歌う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時に注意したことを思い出しながら歌う。 ・ワークシートで本時で学んだことを確認する。 	<p>4. 本時の学習で自分なりにとらえることができた曲想を生かしながら歌唱表現することができるように注意を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の成果を振り返り、次時の学習課題を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語の響きと、弱起の旋律の動きを生かしながら歌唱表現を工夫することができたか。

第二時の学習指導過程（指導者：T1 水山玲子・T2 長島真人）

	学 習 活 動	T1 の 指 導 上 の 留 意 点	T2 の 指 導 上 の 留 意 点
導 入	<p>1. 本時の学習課題を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者と対面する。 ・校歌を斉唱する。 	<p>1. 前時の学習の成果を振り返りながら、本時は、TT で、合唱表現を工夫する授業を試みることを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指揮で歌唱を促す。 	<p>1. 本時の学習では、日本語の響きと弱起の旋律の動きを生かしながら、部分二部合唱を試みるために、ピアノ伴奏に注意するように伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ伴奏で歌唱を促す。
展開(1)	<p>2. 歌詞の意味と日本語の響き、ふしのまとまりを思い出しながら、歌唱表現を工夫する。</p>	<p>2. 指導者の範唱とピアノ伴奏をよりどころとさせながら、歌詞の意味と日本語の響き、ふしのまとまりを思い出すように促す。</p>	<p>2. 歌詞の中にみられる日本語の抑揚を生かすだけでなく、さらに、弱起の旋律の動きを生かすために、ふしの山（ピーク）に注意するように促す。</p>

	学 習 活 動	T1 の指導上の留意点	T2 の指導上の留意点
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 範唱用 CD を聴き、楽曲の雰囲気を出し出す。 ・ 主旋律を含む伴奏で歌う。 ・ 日本語の響きと歌詞の意味を出し出す。 ・ 正規のピアノ伴奏で歌う。 ・ 旋律の中にみられるエネルギーの推移を思い出しながら、より豊かな旋律表現を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時で試みたように、旋律の動きに注意しながら聴かせる。 ・ 主旋律を含むピアノ伴奏で歌唱を促す。 ・ 歌詞を分節化しながら、朗読し、その模倣を促す。特に、「星空」が何をたどっているのかを考えながら模倣するように促す。 ・ 「やさしく あおくもえ」と「やさしく まどにゆれ」という歌詞に着目させ、写真を参考にさせながら、優しくまたたく星空の情景を音楽から想像させる。 ・ 指揮で歌唱を促す。歌詞の動きを思い出すことができたかどうかを評価する。 ・ 歌詞を提示し、弱起の旋律を生かすために必要とされる旋律の山を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 旋律の動きを思い出し、正規の伴奏で歌えるようになることが課題であることを伝える。 ・ 旋律の動きや日本語の響きが生かされているかどうか注意到しながら聴き、形成的な評価を行う。 ・ 群読を聴き、日本語の響きが生かされるように工夫を促す。 ・ 主旋律を含む伴奏と正規の伴奏を臨機に変換しながら、自立的に旋律を表現することができるように促す。 ・ ピアノ伴奏をしながら、必要に応じて範唱を行い、弱起の旋律の動きを提示する。
		<p>「楽曲の中にみられる日本語の響きと、弱起の旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を思い出しながら、歌唱表現を工夫しているか」</p>	
展開(2)	<p>3. 弱起の拍の流れと和声の動きをよりどころとしながら、第三フレーズの低旋律の動きを把握し、部分二部合唱の表現を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の低旋律の範唱や主旋律と重ねた二重唱の範唱を聴く。 ・ 低旋律の動きを把握する。 ・ 二つの声部に分かれて部分二部合唱を試みる。 ・ 範唱用 CD を聴き、低旋律の動きを確認する。 	<p>3. 範唱や和声の動きを伴ったピアノ伴奏を提示しながら、低旋律の動きを把握させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語の響きと拍節構造に注意を促しながら範唱する。 ・ 和声の動きを伴いながら、低旋律の動きを把握することができるように伴奏する。 ・ ピアノ伴奏によって和声の動きを提示しながら、合唱することができるように注意を促す。 ・ これまでは聴き取ることができなかった低旋律の動きを把握することができたかどうかを確認する。 	<p>3. ふしのまともに注意しながら、主旋律と同じ拍節構造が低旋律においても表現できるように工夫を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語の響きと拍節構造に注意を促しながら範唱する。 ・ 低旋律を範唱しながら、主旋律と同じように、日本語の響きやふしのまものが生かされた歌唱になるように注意を促す。 ・ 「愛の歌ささやき」という歌詞に着目させ、星空の思いを音楽から想像し、歌唱表現に生かすように促す。 ・ 聴く前に、低旋律の動きを聴き取るように注意を促す。
		<p>「和音の動きと、ふしのまともに注意しながら、低旋律の動きを把握し、楽曲全体の曲想をとらえ直しながら、合唱を試みることができたか。」</p>	
展開(3)	<p>4. 二つの声部が響きあう効果が生かされるように注意しながら、歌の気持ちにふさわしい合唱表現を工夫する。</p>	<p>4. 二つのグループに分かれて合唱表現の工夫ができるように、学習環境を組み替える。</p>	<p>4. ふしのままと、和声の動き、二つの声部が響きあう効果に注意しながら、合唱表現を工夫するように課題を設定する。</p>

	学 習 活 動	T1 の指導上の留意点	T2 の指導上の留意点
	<ul style="list-style-type: none"> ・二つのグループに分かれて二部合唱の表現を工夫する。 ・二つの旋律が響きあう効果に注意しながら、指導者による無伴奏の範唱を聴く。 ・二つのグループに分かれて、相互に発表しあい、望ましい合唱表現を工夫する。 ・範唱用 CD を再度聴き、歌の気持ちにあった歌唱表現を全員で工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子キーボードを活用しながら、ふしのまとまりと低旋律の動きに注意を促す。 ・主旋律と低旋律を交換しながら範唱する。 ・相互に分かち合い、よさを認め合いながら、自分たちの成果を見つめ直すように示唆する。 ・相互に発表し、気づいたことを意識しながら、範唱用 CD を聴き、合唱を仕上げていくことができるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子キーボードを活用しながら、ふしのまとまりと低旋律の動きに注意を促す。 ・主旋律と低旋律を交換しながら範唱する。 ・相互に発表しあい、聴きあう前に、批評の観点として、ふしのまとまりと二つの声部が響きあう効果が生かされているかどうか、そして、星空の気持ちが生かされた合唱になっているかどうかに注目するように促す。 ・「星空」「しずかに」「愛の歌」「ささやき」という言葉に着目させ、歌の気持ちを音楽から想像しながら、合唱表現を工夫することができるように促す。
まとめ	<p>5. 本時のまとめとして、ピアノ伴奏に合わせて、全員で合唱する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時に注意したことを思い出しながら歌う。 ・ワークシートで本時で学んだことを確認する。 	<p>「ふしのまとまりと二つの旋律が響きあう効果を生かしながら、合唱表現を工夫することができたか」</p> <p>5. 本時の学習への取り組みの態度を評価し、学習の成果を振り返りながら合唱するように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の成果を振り返り、次時の学習課題を伝える。 <p>「歌の気持ちを合唱表現に生かすことができたか」</p>	<p>5. 本時の学習で自分なりにとらえ直すことができた曲想を生かしながら歌唱表現することができるように注意を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習の成果から、今後の音楽の学習に生かすべきことを総括的に示唆する。

(5) T.T. による音楽授業の実践の成果

T.T. による実践は、事前に授業者の双方で教材解釈や学習目標の設定、学習指導過程の立案に関して、入念な確認と共有の作業が必要であった。特に、歌唱指導の場合は、指導者による音楽的なパフォーマンスとしてピアノ伴奏や範唱、指揮等の準備も共同で行う必要があった。さらに、公開授業の前日では、構想した学習指導過程の展開を確認しあいながら、子どもたちへの働きかけの一つ一つを確認し合う必要があった。要するに、一人で準備するときには必要とされなかった教授ストラテジーの確認作業が必要になった。そのために、多大な時間を費やすことになったが、結果としては、学習指導の詳細を対話を通して入念に工夫し、子どもたちの学びの展開を深く展望することが可能になった。実際の授業では、子どもたちに音楽に注意を促す活動と、共に学び合っている他の子どもたちの音楽表現に注意を促す活動を試みて

いったが、子どもたちと筆者と水山教諭の活動は、基本的には想定していたとおりに展開され、授業を終えることができた。子どもたちは、初めて合唱教材に取り組んだが、音楽を共に分かち合う喜びを実感したようであった。授業を終えてみると、子どもたちの学びは、一人の教師による授業より効果的に展開されたように思われた。子どもたちは、一人ひとりが個別的に音楽にかかわり、探究しているのではなく、教師や他の子どもたちの表現行為を通して音楽を探究し、自らの音楽に対する解釈を深め、自らの音楽表現を洗練させているようであった。特に、このような分かち合いの場において、一人の指導者でなく、子どもたちの学びのために授業の構想を分かち合った複数の教師が関わった場合、子どもたちの学びは、ますます相互に影響しあい、高め立っているようであった。つまり、T.T. による指導者側での分かち合いの成果が、子どもたち相互の分かち合いの可能性をいっそ

う高め、学びの可能性をいっそう高めていったようであった。子どもたちの学びが拓かれ、指導者たちの方にも、今後の学習指導の可能性に関して、新しい発見が与えられる授業が実現されたということである。したがって、このような、入念な教材研究や子ども理解に裏付けられた授業の構想と実践を大学で学ぶ学生たちと筆者の中で実現することができたならば、学生たちの授業実践力の育成がますます助長されていくように思われる。それゆえに、学生たちとT.T.を組み合わせながら、ともに音楽授業の学習指導を研究していくためには、学生たちの授業実践力の特性をより詳細にとらえ、学生たち自身が自らの授業実践力の自己点検を行っていくことができるようなガイドラインを開発していくことが課題になってくる。なぜならば、学生たち一人ひとりの個性的な力量の特性に基づいて、技や知見を共有し、学習指導を共同的に展開していかなければならないからである。そこで、次に、この課題について述べていく。

2. 音楽授業で期待される授業実践力の特性 —評価スタンダードの開発をめざして—

音楽授業で期待される授業実践力は、他教科と同様に、一般教育学と音楽科教育学、そして、音楽科教育内容学という三つの専門分野から引き出された理論的な知識と具体的な学習指導の経験が一個人の内面で統合されたものである。つまり、授業実践力は、理論知と経験知が統合されたものである。したがって、学生たちには、音楽科教育学を中核とした学術的な諸理論を理解する場と、これらを授業実践の場で活用する場が大学において必要とされている。遠隔授業観察システムの活用は、学生たちが音楽授業の観察を通して、観察力や批判力を高め、自分自身の授業を反省的にとらえ直す場を提供していくことが大いに期待されるが、ここにT.T.による模擬授業体験や実習授業体験が加われば、学生たちの理論知と経験知の統合はいっそう高められることになるのではないだろうか。そこで、最後に、学生とのT.T.による授業研究を実現させていくための準備段階として、音楽授業で期待される授業実践力の構造とその評価スタンダードに関して、素描しておきたい。

反省的な思考を展開する音楽教師にとって音楽授業の営みには、授業の構想と実践、そして、自らの授業を対象化して評価するという三つの側面が想定される。したがって、音楽授業で期待される授業実践力は、授業構想力と授業展開力、そして、授業評価力という三つの側面からとらえることができる。

授業構想力は、音楽授業を実践する前に準備する能力群を形成している。ここには、学習指導要領や特定の学校カリキュラムの理論に基づいた学力観に基づいて、目

標設定の枠組みとなる目標の分類と具体的な設定に関する技量や、音楽の学習理論に基づいて子どもたちの学習状況を的確に把握する能力、教材を意味づけ、授業のあらましを構想する能力、構想された授業の流れを学習指導案として授業計画を成文化する能力が中核となる。さらに、授業の構想に関しては、教材や補助資料の選択、教材の構造的編成、学習過程の組織化、学習形態の工夫、教授方略の工夫等の諸能力が必要とされている。また、授業計画の成文化に関しては、学習指導案の作成、学習評価シートの作成、学習補助資料の作成の能力が必要とされている。

授業展開力は、授業構想力をふまえながら、音楽授業の実践の場で臨機に発揮される能力群を形成している。ここには、学習指導のために発揮される一連のパフォーマンスの技量や、子どもたちに適切に対応する能力、教具を活用する技量、子どもたちの学習行為を評価する能力が中核となる。学習指導のために発揮されるパフォーマンスは、音楽的なパフォーマンスとして、範唱、範奏、伴奏、身体表現や指揮、アインザッツ（合図）の技量が必要とされ、言語的なパフォーマンスとして、基礎的な発話、適切な語彙、演技性、説明、助言、範読、例話、発問、指示、司会、応答の技量が必要とされる。子どもたちへの接し方として、ジェスチャーや視線（アイコンタクト）、表情、教室内での位置取り、子どもの発言への対応、突発事故への対応等の技量が必要とされる。教具の使用として、板書の内容、板書の技能、教育機器の活用スキル、資料の活用スキルが必要とされる。

授業評価力は、自分の授業や他者の授業を対象化し、その成果と課題を明らかにする能力群を形成している。ここには、自分の授業の構想と実践を評価する能力と、他者の授業の構想と実践に対する評価する能力が必要とされる。

このように、音楽授業で期待される授業実践力は、多様な能力に細分化されていく。今後は、これらの諸能力の中で中核的なものと周辺的なものとの関係を明らかにし、学生たちに把握可能な能力体系にとらえ直すことが課題である。また、これらの能力が達成された状況を明らかにしていくために、以下のような段階を考えている。

第一段階：3年次の教育実習終了時に期待される達成水準
附属学校の指導教諭の支援のもとで、円滑に実践が展開できる状態

第二段階：4年次の教員採用試験受験時に期待される達成水準
公立学校での授業実習や教員採用試験での模擬授業がスムーズにできる状態

第三段階：就職後に期待される達成水準

授業研究会等で公開授業を行ったり、大学の実地指導講師を行ったり、教育実習生や後輩教師の指導が円滑にできる状態

注

- 1) 拙稿 「遠隔授業観察システムを活用した大学授業の改善に関する実践的研究—臨床的な指導力の育成をめざした音楽授業の研究を通して—」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』 第3号 2006 pp.67-78

これらのうち、第二段階を標準的な段階と考え、第一段階は、その準備段階、そして、第三段階は、教師としての発展をめざす方向目標的な段階として検討していくことにした。今後は、学生たちや附属学校の教諭の意見を参考にしながら、よりリアルな段階に改善していく必要がある。そして、先に明らかにした諸能力の観点に基づいて、個々の段階の具体的な達成状況を成文化していくことが課題である。このことに関しては、検証的な考察が必要になってくると考えている。

おわりに

遠隔授業観察システムは、大学教員の理論と経験とが統合された臨床的な授業場を学生たちに提供し、これによって、学生たちは、理論と実践が統合された具体的な状況を観察し、自分自身の授業実践力を反省的に検討する機械を得ることが可能になった。したがって、次に、学生たちに期待されることは、このような反省的な思考に裏付けられて、自らが再度実践者として学習指導を試み、自らの授業実践力を具体的に向上させることになる。そこで、大学では模擬授業による学習指導の演習が盛んに行われ、教員採用試験の準備が進められることになるが、本研究は、この段階で直ちに学生たち一人ひとりに単独で学習指導の演習を促すのではなく、大学教員と学生によるT.T.によって、模擬授業を展開する可能性を模索した。T.T.による音楽授業は、事前に指導者の間で教材や授業のねらいに関する共通理解が必要となり、臨床的な場面では暗黙の理解に基づいて、相互の行動を予期しあいながら、指導を展開していくことになる。したがって、このようなT.T.による学習指導を大学教員と学生が行うと、演習の目的となる授業の理論や学習指導の技が共同的に検討され、共有されていくことが期待される。特に、このような演習の場面で、大学教員が学生たち一人ひとりの授業実践力の達成度を明確に理解している場合は、T.T.を通して、双方のコミュニケーションが適切に行われ、さらに、このコミュニケーションの輪の中に学習集団を関わらせることによって、学びの共同体がよりいっそう効果的に形成されていくように思われる。今後は、授業実践力を自己点検するために活用される評価スタンダードを暫定的に作成すると同時に、これまでの情報メディアを活用しながら、実際に学生たちとのT.T.を試み、より適切な教師教育の展開方法を吟味していきたい。